

初見かおり著

『ハレルヤ村の漁師たち
—スリランカ・タミルの村
内戦と信仰のエスノグラフィー—』

左右社 2021年 349ページ

たかくわ ふうみ こ
高桑史子

スリランカは1983年から2009年まで内戦が続いていた。政府軍と反政府武装勢力「タミル・イーラム解放の虎」の間で繰り返された闘いで10万人もの命が奪われた。しかし、死者の数が数字で示されるだけでは、この26年にもわたった内戦下で人々がどのようにして死や恐怖と向き合いながら生きのびたのかわからない。

人類学者である著者は、絶望的な戦争状態が日常化したスリランカ北部ヴァンニ地域で、内戦で「一番弱い立場にあり、苦しい生活を強いられている北の人びとの中で調査をし、彼らの記録を残したい」（44ページ）との目的をもち、タミル人カトリック教徒と生活をともにした。本書は、2006年夏から2010年4月までの4年間にわたり記録された、内戦を生きぬいた人たちの「生きる勇気の更新」（333ページ）のエスノグラフィーである。あの26年間にいったい北部で何がおこっていたのか、その詳細を読者は知ることになる。

本書は第一部「ハレルヤ村との出会い」、第二部「ヴェラ家と周辺の人びとの物語」、第三部「シリア婆さんの帰郷」の3部構成であり、かつて住んでいた漁村バルンカリパトゥ村からマナー島にある避難民キャンプ地（収容施設）「ハレルヤ村」に移動させられた人たちの日常と周辺の出来事が描かれる。単なる年代ごとの記録にとどまらず、戦争状態で生きざるをえなかった人々の壮絶な生と死と、再生の記録であり、恐怖と絶望の日々を生きてきた人たちの生きる勇気を理解しようとする著者の葛藤が描かれる。

内戦中は直接戦闘が行われなくとも、常に恐怖が

身近にある。政府軍と反政府軍の板挟みに加えて、インドからやってきた平和維持軍の犠牲にもなった。政府軍が反政府勢力から奪還した村では、寄生虫のように住み着いている警察（全員がシンハラ人）に加えて、新しくやってきた軍は夜中に家々を回って歩くようになり、村人たちはいつ連行されるかわからない恐怖と、レイプから逃れるために教会に避難する。教会は信仰の場であり、同時に命を守る場でもあった。政府軍側と巧みに交渉をした聖職者が盾になり、時に命をも奪われながら人々を守ってきた。

ヴァンニ地域はもともと宗教や民族を異にする人たちが共存する、多様性に富んだ地域だ。1970年代の反タミル暴動から逃れてきた高地に住むタミル人も住み着き、漁業が盛んな当地にはインド人漁民も多く住んでいた。ムスリム（イスラム教徒）も多数居住していた。教会、ヒンドゥー神祠、モスクが至る所にあり、仏教や寺のみによってイメージされるスリランカとは異なる光景が広がっていた。しかし、反政府勢力は、ムスリムを当地から追放した（1990年10月）。政府によるシンハラ化の波は当地にも押し寄せ、タミル語を母語とする人たちの多くが、政府によってシンハラ人と登録された。内戦は人々の命だけでなく多文化／多民族共存というヴァンニの伝統も破壊した。

非戦闘地域と同様に、人々は生きていくために内戦中であっても収入を得る道を探さねばならない。出漁のため、嫌がらせに耐えながらチェックポイントをいくつも超え、操業制限のもと、浜に行かねばならない漁民たち、ハウスメイドとして中東に出稼ぎに出て異国で死亡する女性たち。インド洋津波でも多くの犠牲者が出た。

内戦終結直前の数か月間、戦闘地域に残った人々は両勢力の板挟みになった。反政府勢力による徴兵か、政府軍の攻撃と連行という絶望的な状況が生じ、逃げ惑うなかで4万人以上が殺害された。最後の激戦地であるムラティヴの海岸を抜けて、何とか政府軍側に逃げることもできても、反政府側の人間か否か疑われる。こんなヴァンニの生存者に囲まれ、戦争体験の苦しみを普通の言葉では表現できないと問い続けながら、著者はその経験を綴り、内戦に生きる人々を描いた優れたエスノグラフィーを完成させた。

こんな苦しみがあってもなぜ人々は神に祈りをさ

さげられるのか。この疑問に著者は答えを見出したのだろうか。すべてを包み、すべてを理解し、すべてを許すキリストの姿とともにある村人たちは勝者の側にあるのだというが、著者は納得したのだろうか。死と絶望からの再生の道を見出した彼らは、極限状況にありながら、調査者である著者を迎え入れ、

必死で守ってくれた。本書は恐怖や絶望のなかでも人間の尊厳を失わない人々を讃える書である。勇気ある聖職者やハレルヤ村の人たちの崇高な姿に心を打たれた。

(東京都立大学名誉教授)